

インタビュー

原爆、原発、日本のこれから

詩人 アーサー・ビナード



Arthur Binard (アーサー・ビナード)

1967年、米国ミシガン州生まれ。20歳の時に、ヨーロッパに渡り、ミラノでイタリア語を習得。ニューヨーク州のコーゲート大学で英米文学を学び、卒業と同時に来日し、日本語での詩作を始める。2001年、詩集「釣り上げては」(思潮社)で中原中也賞、05年に「日本語ぼこりぼこり」(小学館)で講談社エッセイ賞、07年に「ここが家だ ベン・シャーンの第五福竜丸」(集英社)で日本絵本賞、08年には「左右の安全」(集英社)で山本健吉文学賞を受賞。主な著書に、詩集「ゴミの日」(理論社)、訳詩集「日本の名詩、英語でおどる」(みすず書房)、エッセイ集「日々の非常口」(新潮社)、絵本「はらのなかのはらっぱで」(フレーベル館)、翻訳絵本「ダンテライオン」(福音館書店)、「あつまるアニマル」(講談社)、「ひとりぼっち?」(徳間書店)など多数。文化放送と青森放送で、ラジオ・パーソナリティーも務める。



インタビュアー
穴戸きくみ

福島中央市民医療生協
須川診療所 事務長

漢字と出会い、来日

穴戸 アメリカで生まれて英語圏で育ったアーサー・ビナード(以下、ビナード)さんが、来日して日本語で詩を書かれるようになったきっかけからお話ししていただけますか？

ビナード 大学で英米文学を学び、卒論を書いている時に、たまたま「漢字」に出会いました。20歳の頃にミラノでイタリア語を覚え、それからインドでタミール語を学び、言語が変わると世界が違って見えるという発見をしていました。「漢字」との出会いには、どんな世界を見せてくれるのだろうという期待があり、強烈な刺激を受けたんです。「漢字」が使われている言語ということ、最初は中国語と日本語のどちらを学ぼうかと悩んでいました。日本語について調べるうちに、アルファベット26字だけの単純化された世界で育ったばかりにとっては、驚きに満ちた日本

語の世界にひきこまれました。「漢字」だけでなく「ひらがな」「カタカナ」もある。異質なものが豊かに混ざりあっているというところがとても魅力的でした。それで、大学卒業と同時に日本に来ました。

「ベン・シャーンの第五福竜丸」

穴戸 アメリカ人の画家、ベン・シャーンの絵にビナードさんが文を寄せて「ここが家だ ベン・シャーンの第五福竜丸」という絵本を出版されています。出版の経緯をお聞かせください。そもそもビナードさんと第五福竜丸の出会いはいったったのでしょうか。

ビナード ベン・シャーンが亡くなったのは、ぼくが1歳の頃。物心ついた時にベン・シャーンはこの世にいなかったのですが、父親が画集を大切に持っていて、小さい頃からその絵はよく見ていまし



た。そこに「ラッキードラゴン・シリーズ」という連作もあって、当時のぼくはその絵の歴史的背景も知らずに親しんでいました。そんなふうになんていっていいんです。ベン・シャーンと「ラッキードラゴン」という言葉が記憶にあったものが、第五福竜丸事件を描いた作品だったとわかったのは日本に来てからのことです。

英語で書かれた東京のガイドブックに「ラッキードラゴン・ミュージアム」というのが、夢の島公園にあると紹介されていました。本物の第五福竜丸の船といろんな資料が展示されている「第

五福竜丸展示館」のこと。そこで初めて、記憶がつながったんです。「子どもの時に見ていたベン・シャーンの絵はこれだったのか！」と驚きました。同時に、自分の歴史認識には大きな穴が空いていたんだと気がつき、そこから第五福竜丸事件について調べ出したんです。

矢野 1954年3月1日、日本のはえなわマクロ漁船・第五福竜丸は、南太平洋のビキニ環礁でおこなわれた米軍の水爆実験に遭遇しました。乗組員23人は全員被ばく、2週間かかって焼津漁港に戻り入院します。半年後には、久保山愛吉さんが放射能被ばくで亡くなりました。

ビナード ベン・シャーンが第五福竜丸事件にとりくんだのは、雑誌の仕事で第五福竜丸事件に関するルポ記事の挿絵を描いたのが最初でした。この挿絵を描いたことで、ベン・シャーンは第五福竜丸と向き合い、この事件

が人類にとってどれほど大きな意味を持っているかを掘り下げて考え、人生最後の大作としてタブロー画を描くようになったんです。この第五福竜丸の絵は、アメリカの国立美術館をはじめ、世界の美術館に飾られています。福島県立美術館もすばらしい絵を所蔵しています。こうした絵を集めて本が作れないかと、ある編集者が考えたんです。ただ、画集にするべきか、絵本にするべきか、どんな本にするか悩んでいて、ぼくのところに話が来た。それが絵本づくりのはじまりでした。

第五福竜丸の英雄たち

矢野 この絵本を出版されることで、第五福竜丸を通して核兵器廃絶の運動をすすめるという思いもあったのでしょうか。

ビナード 絵本の語り手としての仕事は核兵器廃絶を訴えることではありません。ぼくがやるべきことは、第五福竜

丸事件の本当の物語を語ること。第五福竜丸事件の本質を語れば、ぼくたちには核廃絶の道しかないことがわかるはず。みんな悲劇だけを強調して語る。23人の乗組員が放射能被ばくに苦しみ、半年後には無線長の久保山愛吉さんが亡くなりました。かわいそうな久保山さん、気の毒な乗組員といった被害者物語、犠牲者物語にします。

第五福竜丸事件が被害者の物語として扱われるのは、とんでもない歴史の歪曲です。もちろん乗組員は被ばくし、被害を受けています。しかし、本質はそこではないと思うのです。第五福竜丸事件は、本当は英雄の物語です。

矢野 英雄の物語というのは、どういうことなのでしょう？

ビナード 米政府は53年から「原子力の平和利用」というキャンペーンを派手に張り、国連でアイゼンハワー大統領が「アトムズ・フォー・



ピース」を売り込みました。核の平和利用を政策として打ち出す一方、3ヵ月後には南太平洋のビキニ環礁で水爆実験をおこないました。

第五福竜丸はその死の灰を浴びたのです。水爆という米軍の軍事機密に触れたわけですから、証拠隠滅のために撃沈されかねません。そこで、無線を打てば米軍に傍受され攻撃されると考え、第五福竜丸は救難信号を発することなく自力で焼津漁港まで戻ってきました。途中でもしアメリカの船や飛行機に発見されたら、母港に無線を打って最後の抵抗として足跡を残すつもりだったそうです。第五福竜丸の23人は水爆実験の生き証人というだけではなく、証拠品として「死の灰」

のサンプルを持ち帰った。その結果、ビキニ環礁の水爆実験が広く知られるようになり、原水爆禁止の運動が世界規模で起こったのです。

生還して核実験を知らせた第五福竜丸の乗組員は、まさに英雄です。核兵器を平和利用といっごまかそうとしていたことが明らかになったわけです。まったく無防備なマグロ漁船が、軍事大国のアメリカに勝ったのです。こうした英雄の物語は、一度聞いたらみんな忘れないものです。

穴戸 でも、忘れてもらわないと困る、この物語が忘れ去られるのを期待して待っている人たちもたくさんいます。

ビナード そうなんです。被害者の物語として小さくまとめられると、みんな忘れちゃうんです。なぜか？被害者の物語は、毎日つくられているからです。今、福島を中心に日本は被害者物語の渦です。オーストラリアのウラン鉱山でも被害者物語が

渦巻いています。アメリカ・コロラド州のロッキーフ

ラツにあるプルトニウム再処理工場、その周りの住民は発がん率がぞっとするほど高いです。被害者物語は世界規模で増殖しています。でも、第五福竜丸事件を勝利の物語としてその本質を語ってあげば、20世紀の大叙事詩並みのインパクトで伝わる可能性があると思っています。

**原発、基地、ダム…
利権は続くよどこまでも**

穴戸 原発、沖縄の基地問題、八ッ場ダム建設などは、すべて同じ。お金がからんだ利権構造の上にあると、ビナードさんはおっしゃっています。

ビナード 構図はすべていっしょですよ。過疎に悩んでいるような小さな自治体に巨大なものを押しつけて、買収して、巨額の利権構造を作って、みんなを中毒にさせる。中毒体質になるのは、原発も

基地もダムも同じです。

穴戸 それがなければ生きていけなくなるわけですよ。一度動き出して、一度飲んでしまったら、もうその薬が切れると大変なことになります。

ビナード どのように買収して、どうやって中毒化するか。原発事故でカラクリがあまり出されて、みんな気づくようになりました。

穴戸 同じ構造だから、より鮮明になったわけですね。

ビナード 地元の人たちが本当に求めているのは、ダムではないし、原発でもないし、基地じゃないんです。生活なんです。将来がちゃんと考えられる、確かな暮らしの設計がほしいんですよね。

穴戸 原子力に代わる自然エネルギー、例えば太陽光発電などはなぜ広まらないのでしょうか？



アーサー・ビナードさんの サイン入り絵本をプレゼント!

『ココが家だ
ベン・シャーンの第五福竜丸』

絵：ベン・シャーン、構成・文：アーサー・ビナード
集英社

3名様

本誌綴じ込みハガキにてご応募ください。

ビナード 太陽は人を差別し

ない。お天道様は、誰にでもついで回ります。金持ちも貧乏人も区別はしません。だから誰かが利権を占有することができません。一方、

原子力は危険と秘密に満ちているので、一般市民を締め出して、ある一部の人間が占有できるようになっています。原子力村を作って、一部の人間が利益を搾取することができるようです。利権構造を守る権力者や大企業にとって、ソーラーパネルを張れば誰でも電力が手に入る太陽光発電は排除する必要があります。だから広まらないのです。

詩集の英訳と

新作絵本への思い

矢戸 では最後に、今後の夢や目標を聞かせていただけたら

ビナード ぼくには創作の仕事と翻訳の仕事があります。絵本も自分で創るものと、翻

訳して日本語版や英語版の絵本を作る場合があります。今すすめている仕事は、福島の人・若松丈太郎さんが書いた詩の英訳です。

若松さんは94年にチェルノブイリ原発事故の取材に行きました。そしてチェルノブイリで起きたことと、福島でこれから起きるであろうことを重ね合わせて、「神隠された街」という詩を発表しました。若松さん自身が住んでいる南相馬市の南にある福島第一原子力発電所でメルトダウン事故が起きた場合、具体的な自治体の名前も挙げて、原発から30km圏内がどうなるかについて書かれています。今読むと「ええっ!」という感じです。まさに、今福島で起きている状況そのもの。あまりにも予言的な内容に驚かされます。

矢戸 若松さんにお会いになったことはあるのですか。

ビナード はい、会いに行きました。その時、ぼくはいっ

たんです。「若松さんは、本物の予言者だね」と。すると若松さんは、「私は予言したのではなくて、ただ観察していただけなんです」といってました。「自分の周りの、

自分が住んでいる地域の小さな生き物、植物、動物、地域社会がどのように原発の影響を受けているのか、それを私は観察していたんです。観察していると、東京電力の隠蔽体質がいかに骨の髄までしみ込んでいて、彼らは安全だということけれど、まったく安全ではないことがわかる。私がやっていたことはチェルノブイリというレンズを通して、福島を見ていただけです。誰でもちゃんと観察してさえいれば、見抜けるはずだった」と。90年代から原発の危険性を鋭く捉えてきた若松さんの詩を英訳して、より多くの人に届くようにするのが夢のひとつです。

そしてもうひとつ、形にしようとしている夢が新作絵本の創作です。靴や帽子、ドレス、時計、弁当箱など、広島

で被ばくしたモノたちが語る絵本を作ろうと考えています。今、広島のことを語ることは、長崎を語ることであり、福島を語ることであります。広島も長崎も、そして福島も、すべて本質は同じ。広島島のウラン爆弾、長崎のプルトニウム爆弾、そして原発を考えると、器の違いぐらいしかないのです。福島第一原発の一号炉の中に入れた棒は、広島島の原爆と同じウラン235ですからね。同じものを違う器に入れているだけです。核開発の歴史も全部つながっているし、かかわっている企業もいっしょ。こうした核にまつわる本質的な話を、子どもたちでも読めるようなわかりやすい物語にして伝えたいですね。来年の夏ぐらいには形にしたいと思っています。

矢戸 新作絵本のでき上がりが今から楽しみです。完成したら、ぜひ読ませていただきます。今日はありがとうございました。